

## 第11回 池波正太郎

池波正太郎の小説はこれまで、数多く時代劇として映像化されてきた。今回は特に、1989年からフジテレビが松竹と製作して大ブームを巻き起こし、今も単発スペシャル作品として続いているテレビシリーズ『鬼平犯科帳』と、それ以降に作られた池波原作時代劇の魅力について検証していきたい。

■『鬼平犯科帳』（テレビシリーズ 第1シリーズ 1989～90年、第2シリーズ 90年～91年、第3シリーズ 91年～92年、第4シリーズ 92年～93年、第5シリーズ 94年、第6シリーズ 95年、第7シリーズ 96年・97年、第8シリーズ 98年、第9シリーズ 2001年、  
／フジテレビ＝松竹）

●第1シリーズ 第2話『本所・桜屋敷』（監督：小野田嘉幹／脚本：井手雅人／出演：中村吉右衛門、萬田久子、江守徹ほか）

主人公の火付盗賊改め長官・長谷川平蔵を中村吉右衛門が演じたこのシリーズの大きな魅力は、京都でのロケーション撮影を多用することで生まれた江戸情緒あふれる映像にある。

京都には豊富なロケーションがある。太秦の撮影所から少し足を伸ばしただけで、風光明媚なロケ地に行き着いてしまう。西は保津川の溪谷から丹波の山々、東は山科を越えて琵琶湖、北には日本海……撮影所からほぼ徒歩圏内ともいえる嵐山や嵯峨野界限には、江戸時代さながらの風情が薫る空間が数多く現存している。また、昔のままの姿を残し続ける世界遺産・国宝クラスの寺社仏閣も撮影に協力的だった。周辺エリアを回るだけで、ありとあらゆる時代劇の景色が、当時の雰囲気そのままの風情で手に入ってしまうのである。

ほんの短いシーンやただ人が行き交うだけのシーンでも、京都周辺の名所旧跡でロケーション撮影を敢行させたのである。

テレビ時代劇ではロケ撮影はあまり歓迎されないところがあった。背景の景色がそのままに映り込むことで、撮影した季節の風情もそのままに画面に取り込まれる。その結果、もし放送時期が撮影した季節と異なる場合、視聴者から共感を得られにくいという恐れがあったからだ。

だが、池波が描くのは、日常の中で季節の移ろいを楽しむ人々のドラマだ。そのため、積極的に「季節の映像」を狙うことの方が効果的にドラマを伝えることができる。実際、『鬼平』の画面からは、従来のテレビ時代劇には見られなかった季節の情感あふれる美しい江戸の風景が映し出されることになったのだ。

その象徴となったのが、毎回のエンディングだろう。仁和寺の桜、近江八幡の舟遊び、

摩毛橋の霧雨と紫陽花、線香花火の背後に輝く打ち上げ花火、東福寺の通天橋の紅葉、降りしきる雪と屋台の蕎麦屋から立ち上る湯気……移ろう季節の映像がジプシーキングスの演奏する哀切なメロディに乗って送り出されることで、『鬼平』のドラマに独特の余韻がもたらされた。

それを象徴するシーンが第二話『本所・桜屋敷』で見られる。物語の終盤、こんな映像が挿入される。

一とある春の昼下がり、鬼平と同心・酒井（篠田三郎）を乗せた小舟が満開の桜の舞い散る水路を行く一

京都映画の撮影所にもそれなりの長さの水路は用意されている。二人が小舟に乗るシーンは二度あるが、いずれのシーンも一分足らずの短いシーンだ。それなら撮影所の水路で撮影しても構わなさそうな気もするが、この短いシーンでも、能村はあえてロケをさせている。

従来のテレビ時代劇で描かれてきた江戸には大きく分けて二つの姿があった。それは埃っぽく荒れた、「広大な関東平野に位置する江戸」。そして、店と家が密集し数多くの人間が行き交う「賑やかな都会としての江戸」だ。

一方、池波の描く江戸には、路地のように細かく水路が張り巡らされ、水の流れが人々の営みに深く関わる、水上交通都市としての側面がある。こうした江戸の姿は、従来の時代劇ではほとんど描かれることがなかった。

その点、京都周辺は「水」にまつわる景観に事欠かない。撮影所近辺だけでも、近場なら嵐山、砂利の川原とススキなら桂川、渓谷なら保津川、堤なら淀川、使い勝手の良さなら大覚寺の大沢池、葦と水鳥なら嵯峨野の広沢池、荒涼とした雰囲気なら亀岡の沢ノ池……と、バリエーションは豊富だ。

そして「本所～」のロケ地になったのが、撮影所から車で数時間のところにある近江八幡。ここは美観地区になっていて、桃山時代に建築された城下町と水郷が当時のままに保存されている。さらにここから山を下った琵琶湖水流の「西の湖」畔には葦が広大な範囲に渡って群生。人の手によって作られ年月を保たれてきた「水」と野生の「水」。池波の描く江戸のそのままの世界がそこには広がっている。そこから醸し出される、年月を経ることで培われていった情緒は、撮影所内では醸し出しえないものだ。ここを舟で行く鬼平の姿を見るだけで、我々は江戸の人々の息吹をそのままに感じ取ることができる。短いシーンでもあえて八幡堀でロケをしたことにより、『鬼平』は「水の都」という新たな江戸情緒の映像を手に入れることができた。

今でこそ当然のように思えるこうした情緒あふれる映像は、実はテレビ時代劇史においては革命的なものだったのだ。

■『仕掛人 藤枝梅安』(テレビスペシャル版=90年、93年 テレビシリーズ版=91年/フジテレビ=国際放映)

●90年のテレビスペシャル版(監督:吉田啓一郎/脚本:安倍徹郎/出演:渡辺謙、橋爪功、中村橋之助、美保純、余貴美子ほか)

『鬼平犯科帳』の人気により、以降の池波原作は全て、江戸情緒あふれる映像の中での哀切なドラマとして脚色されていくことになる。そうした世界で輝きを放ったのが、渡辺謙だった。当時、渡辺は白血病に倒れ、その生死すら危ぶまれる状態にあった。そして、奇跡的に危機を脱し、復帰作として選ばれたのが池波の『仕掛人・藤枝梅安』だった。

表では人の命を助ける鍼医者・梅安は、実は裏では金をもらって人を殺す「仕掛人」だった。絶えず死を意識しながら日々を暮らす男という池波の梅安像が当時の渡辺の心と響き合う。そして渡辺は、哀しい宿命を背負うからこそ優しい心にあふれた、センチメンタルな男として梅安を演じていった。

相棒の彦次郎を演じるのは橋爪功だが、渡辺と橋爪は当時、同じ劇団に所属していたというもあり、両者は抜群のコンビネーションをみせる。毎回のよう梅安と彦次郎は梅安の家で酒を飲み、鍋をつつき合う。うす汚れたコタツだけのある狭い殺風景な男所帯の部屋には、鍋の煮える音だけが聞こえてくる。そして、二人はしみじみと互いの人生を語り合う……。このシーンを、渡辺と橋爪は互いにアイデアを出し合いながら台本を大きく膨らませ、芝居をより感情豊かなものにしていった。

ここで描かれているのは、明るい表情を見せながらも、奥底に哀しみと孤独、死への不安を抱えた男たちの姿であり、彼等がせめてもの生を謳歌せんとする姿である。こうしたセリフが、まさに死の淵から生還したばかりで、また再びここに立てなくなるかもしれない危険性ははらむ渡辺謙の口から語られることで、生命の重みのある言葉として、切なく、見る側に迫ってくる。

印象的なのは、最初のスペシャル版のラストシーンだ。

幼い頃に生き別れとなった実の妹(余貴美子)を殺してしまった梅安は、冬枯れの海岸に一人たたずみ、「夕映えの赤い冬空をうつして」目をうるませる。そこには、渡辺謙自身の想いが強く反映されていたという。彼は後に、次のように述懐している。

「撮影は進み、ラストカットを残すのみとなった。日も暮れかかり、あと何分かで撮影不可能という時だった。水平戦上に、ほんの少しだけ雲の隙間が出来、そこに何と、夕陽が顔を出したのである。今を必死に生きながらも、人を殺すという悪業を背負わざるを得なかった梅安。そんな人間にも一筋でも明日を感じられる光は射してくれるんだよ、と語りかけてくるような輝きであった。その夕陽を背中に受けながら、梅安は、また深い闇の中に消えていく。私がこの役を演らせて頂いた意味が、このシーンに凝縮していた」

(『鬼平を極めるⅡ』九五年・フジテレビ出版)

■『闇の狩人』(1994年 テレビスペシャル/テレビ東京=松竹/監督:貞永方久/脚本:吉田剛/出演:村上弘明、蟹江敬三、田村高廣、岸田今日子、畠田理恵ほか)

この時期の池波原作の脚色の特徴が大きく表れているのは、女性キャラクターである。池波が描く女性像は、内面を持たない「男の付属物」であることが多い。それが映像化される際には、その内面が大きく掘り下げられている。

『闇の狩人』はその最たるものといえる。

記憶喪失の剣客・谷川弥太郎(村上弘明)、彼の名付け親になる盗賊・雲津の弥平次(蟹江敬三)、弥太郎を殺し屋として使う香具師の元締・五名の清右衛門(田村高廣)という三人の裏社会の住人が抗争に巻き込まれる中で、それぞれの生き様・死に様が展開されていく。この基本的な設定は、原作と変わらない。

この三人の男たちには、それぞれ女が絡んでいる。弥太郎にはおみち(畠田理恵)、清右衛門にはおはま(岸田今日子)、弥平次にはおしま(姿晴香)。脚本家の吉田剛はこの三人の女、中でも、おみちに原作以上の重要なドラマ上の役割を担わせた。

特に、弥太郎とおみちが初めて結ばれるシーンに、それは集約されている。原作では、弥太郎とおみちの間柄は、「一膳飯屋で働く小女と客」にしか過ぎず、肉体的関係を結ぶまで二人の間では事務的なやりとりしか交わされていない。そして、弥太郎が殺しを終えて疲れ果てた晩、自らの前に現われたおみちの「甘酸っぱい体臭」に胸がさわぎ、「くびすじが微かにふるえている」のを見ているうちに、「勃然と」「体内に衝き上がってくるもの」があり、衝動的におみちを抱く。おみちはなすがままだ。

吉田脚本では、そこに至るまでの両者の心の交流が丁寧に描かれている。

夕暮れの空をぼんやりと見つめる弥太郎。そんな弥太郎の姿が気になり、おみちは思わず声をかけてしまう。

みち「なにをなすっているんです？」

弥太郎「山を見たくて」

みち「山は見えませんよ、ここからじゃあ」

弥太郎「峠を越えたら山が見えて、ああ、あそこに帰るんだ、そう思った……前に……」

みち「お国はどこですか？」

弥太郎「覚えていない……でも、帰りたい。峠を越えて、どこかへ……」

そんな弥太郎に、おみちは強いシンパシイを感じてしまう。

「私も、そう思う。私、江戸っ子だけど、そう思う。きっと親がいないからです。私、みなしごだから……」

こうして、弥太郎とおみちは自らのアイデンティティとなる「ホーム」を持たない者同士として、孤独な想いを共有するようになる。

二人が結ばれるまでの感情の往来も、吉田脚本は丁寧に追っている。

「心ならざる血」を流してしまった弥太郎は、絶望感にさいなまれながら帰路につく。

偶然出くわしたおみちは、そんな弥太郎を心配し、かいがいしく介抱する。そして……。

「私は昔の自分が分からないのだよ。忘れてしまって、何も思い出せないのだよ……」

と嘆く弥太郎に、おみちは寄り添う。

「今だけでいい。私に優しくさせてください。私、谷川様が好きなんです」

そして、「私といると不幸になる」と、おみちを拒む弥太郎を、おみちは優しく抱きしめる。

「私、何もできませんけど、一緒にいて、谷川様にお尽くしして、優しくしてさしあげることにはできます」

ここでのおみちは、原作での弥太郎の鬱屈した想いをぶつける性的対象から大きく昇華された、記憶がない不安と絶望の淵で苦しみをぬく弥太郎を自らの意思で温かく包み込む、慈愛に満ちた崇高な存在なのである。

■『剣客商売』（第1シリーズ1998年、第2シリーズ99年～2000年、第3シリーズ2001年、第4シリーズ2003年、第5シリーズ2004年／テレビシリーズ／フジテレビ＝松竹）

●第1シリーズ7話「箱根細工」（監督：冨永卓二／脚本：田村恵／出演：藤田まこと、渡部篤郎、梶芽衣子、山本學ほか）

●第2シリーズ3話「剣の誓約」（監督：井上昭／脚本：古田求／出演：藤田まこと、渡部篤郎、梶芽衣子、夏八木勲、東野英心ほか）

●第3シリーズ1話「手裏剣お秀」（監督：吉田啓一郎／脚本：野上龍雄／出演：藤田まこと、渡部篤郎、梶芽衣子、寺田農、宇梶剛士ほか）

●第4シリーズ8話「逃げる人」（監督：原田真治／脚本：金子成人／出演：藤田まこと、山口馬木也、梶芽衣子、古谷一行ほか）

●第5シリーズ9話「女と男」（監督：岡屋龍一／脚本：岡本さとる／出演：藤田まこと、山口馬木也、梶芽衣子、加勢大周ほか）

『鬼平』『梅安』と並ぶ池波の「三大シリーズ」として数えられる『剣客商売』もまた、この時期に映像化されている。これもまた、哀しくも優しいドラマに仕上がっている。

『剣客商売』の主人公・秋山小兵衛（藤田まこと）といえば、息子・大治郎（第1、2シリーズは渡部篤郎、第4シリーズから山口馬木也）に道場を譲り自らは若い女房・おはると自給自足の隠居生活を送るといふ、誰もが憧れる＜人生の達人＞だ。が、一方で小兵衛と同じく剣の道に生きながら、幸福とは程遠い最期を迎えた剣客たちも多い。そして、本作での小兵衛の宿命は、彼らの人生を見つめ受け止めることにあった。

第1シリーズ7話「箱根細工」には、病に伏せ、箱根で療養する小兵衛の剣友・横川彦五郎（山本学）が登場する。「己の病み衰えた姿を昔の友には見せたくなからう」という小兵衛の気遣いにより、名代として大治郎が見舞う。彦五郎は若い剣客に命を狙われていた。それは若い頃、彦五郎が剣術に打ち込むあまり母親ともども追い出した実の息子。父への

恨み一つに修行に励み、仕掛人へと身を堕としていた。道を外れた息子を彦五郎に代わり斬る大治郎。息子の死骸を前に彦五郎は力なく崩れる。「今のワシに何が出来よう。若い頃あれだけ打ち込んだ剣術も今となっては跡形もない。全てを投げ打って結局残されたものといえば、老いさらばえたこの身一つだ」。それは剣にしか生きる道を見出せなかった人間が最後に迎えた孤独な姿だった。そんな彦五郎に小兵衛は優しく語り掛ける。「お前さんはワシより少しだけ剣術に熱中しすぎた、ただそれだけのことだよ」言葉もなくなさずき合う小兵衛と彦五郎……。

同じように小兵衛と対極的な生き方を選んだ男に、第2シリーズ3話「剣の誓約」の嶋岡礼蔵（夏八木勲）がいる。小兵衛の弟弟子で大治郎の師でもあるこの老剣客は、十年前に決闘の約定をしたライバル・柿本（東野英心）との決着をつけるため江戸にやって来る。「討たれるは本望。剣客としてこの上ない喜び」という、全身に精気をみなぎらせた剣一筋にストイックな剣客だ。そんな嶋岡が小兵衛宅を訪ねたときに、フとつぶやく。「良い暮らしだ。落ち着く」小兵衛が返す。「春夏秋冬、うつろいのままにな」「生きている者の特権だ」。嶋岡は寂しげに言う。「このような暮らし、ワシにも望んだことがあった。だができぬ。死ぬほど切望したができぬ」「剣士としての宿世は、ワシを捕えて離さなかった……」。老境に際して「ヒラリと身を転じた」小兵衛と「いささかも変わらぬ」嶋岡。二人の剣客の生き様が交錯する。

嶋岡は柿本の弟子によって暗殺され、小兵衛が代わりに決闘する。小兵衛に斬られた柿本は安らかな笑顔で死んでいく。「ようやく死ねる」と……。

同様に、「討たれる」ことでしか生涯を全うできなかった剣客に第3シリーズ1話「手裏剣お秀」に出てくる杉原左内（寺田農）がいる。左内は「剣客としてのやむをえない仕儀」により友を切って出奔。以来、その弟から「仇」と狙われている。にもかかわらず、左内はことさらに大きな道場の看板を掲げ、「息のある限り真正面から立ち向かい、武士としての一生を全うしたい」と、追手に見つかる日を待ちわびていた。やがて追手との果し合いのとき、左内は「待っていたぞ」と初めて相好を崩し、自ら追手に討たれる。

いずれのエピソードでも描かれているのは、剣術へのファナティックな愛情に囚われてしまった者たちの宿業であり、その結果としての悲惨な末路である。そして、いち早くそこから脱して、家族を愛し季節を愛でる小兵衛だからこそ、そんな剣客たちの救われない情念を受け止め、結末をつけてやる事が出来るのだろう。

第4シリーズ8話「逃げる人」では、追手から逃げ続ける生涯を送る老剣客（古谷一行）の「釣る人と釣られる魚、どちらが楽なのでしょうか。釣られる魚は暗い水の底をどこまでも逃げなければならぬ。釣る人はそれを限りなく追いかけていけない」という問いかけに小兵衛はこう答えている。「この年になれば人生も黄昏。釣る人も釣られる人もそれぞれ重荷を背負って長い道のりを行かなければなりませぬ」

釣る人・釣られる人、誰もがみんな辛い「重荷」を背負って生き、黄昏を迎える。人の一生は儚いもの。だからこそ、その一時一時が愛しい。小兵衛の背中にもまた、淋しい黄

昏が差し込んでいた。

予期せぬ黄昏を迎えるのは若者もまた同じこと。第5シリーズ9話「女と男」に登場する小兵衛のかつての弟子・高瀬輝太郎（加勢大周）もまた、小兵衛に抱きとめられながらその報われない生涯を終える。高瀬は魔性の女に身を持ち崩し、死の病の床にあった。絶望のあまり切腹しようとする高瀬を小兵衛が助ける。「なぜお助けくださった」と責める高瀬を懸命に看護する小兵衛。やがて高瀬は「死ぬ間際に思いもかけぬ幸せを得ましてごさいます」と安らかな笑顔を浮かべて息を引き取る。

どうにもならない運命に翻弄される剣客たちと彼らを優しく包み込む小兵衛。人生の辛酸を知り尽くした者同士の黄昏の中での触れ合いと、そのほんの一瞬の暖かさ。それこそがこの『剣客商売』の魅力なのである。

時代劇に観客が求めるのは「こんなことがあったらいいな」というファンタジーである。それは必ずしも、激しいアクションや勇壮なヒーローの活躍を描くというものばかりではない。池波原作の時代劇で情緒あふれる映像と共に描かれるのは、人間の優しさ。しかも、それは決して押し付けがましいものではなく、哀しさを孕んで切なく迫ってくる。日常に疲れ切った今の観客にとっては、それこそが究極のファンタジーな気がする。

#### **【DVD 情報】**

『鬼平犯科帳』（松竹）

『仕掛人 藤枝梅安』（キングレコード）

『剣客商売』（松竹ホームビデオ）